

論文番号 1

担 当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題 名 (原題/訳)

日本人の代表集団における飲酒量の変化に伴う循環器疾患死亡の相対リスク、絶対リスク変化量の推計—NIPPON DATA—

執筆者

岡村 智教、早川岳人、門脇 崇、ほか

掲載誌 (番号又は発行年月日)

日本アルコール・薬物医学会雑誌 2001; 36: 586-595

キーワード

相対リスク、絶対リスク、血圧、HDL コレステロール、回帰係数

要 旨

背景

欧米では適量のアルコールが循環器疾患の発症に防御的に作用するという報告が多いが、本邦における evidence の蓄積は乏しい。本研究の目的は、全国から層化無作為抽出された集団において飲酒習慣と血清脂質と血圧を中心とする循環器疾患の危険因子との関連を検討し、飲酒の循環器疾患の相対リスク、絶対リスクに与える影響を推測することである。

方法

1990年厚生省循環器疾患基礎調査受検者の40～79歳男性2,562人を対象として、飲酒習慣と血圧、血清脂質との関連を検討した。飲酒習慣と血清脂質、血圧との関連は一元配置分散分析で検討し、有意差を認めた危険因子については、更に線形重回帰分析を用いて他の交絡要因を調整し、飲酒量の増加に伴う変化量を推計した。最後に線形重回帰分析で得られた飲酒1合/日の増加による各危険因子の変化量を既存のコホート研究のCox比例ハザードモデル回帰式に代入し、循環器疾患の相対リスクがどのように変化するかを求め、絶対リスクも算出した。

結果

線形重回帰分析で交絡要因を調整し、飲酒量1合/日(エタノール換算23g/日)あたりの回帰係数を求めると、収縮期血圧は2.25、拡張期血圧は1.43、HDLコレステロールは2.70であった。この数値をコホート研究(虚血性心疾患Circulation1994;89:2533-39、脳卒中NIPPON DATA80)の比例ハザードモデル回帰式に代入すると、飲酒量1合程度の増加で、虚血性心疾患発症の相対危険度は0.89に、脳卒中死亡の相対危険度は1.06となると予測された。日本人の代表集団NIPPON DATA80のコホートにおける40～59歳男性の虚血性心疾患死亡率、脳卒中死亡率は、それぞれ、0.44/1,000人年、0.76/1,000人年であり、これに前述の相対危険度を乗ざると、飲酒量1合/日の増加で虚血性心疾患死亡率、脳卒中死亡率は、それぞれ0.39/1,000人年、0.81/1,000人年になると推測された。絶対リスクの変化量は、虚血性心疾患で0.05/1,000人年の減少、脳卒中で0.05/1,000人年の増加となり、虚血性心疾患と脳卒中を合計した循環器疾患死亡の絶対リスクは不変であることが示された。

考察と結論

虚血性心疾患発症率が低く脳卒中発症率が高い本邦のような集団では、アルコールの循環器疾患発症に対する防御効果は欧米諸国に比べて小さい可能性が示唆された。今後追跡調査の結果からこの推計の妥当性を確認する必要がある。